

一般会計予算の反対理由の論点 2

代表質問では、「新焼却施設建設問題、本庁舎整備における市民合意の形成、北鎌倉隧道の安全対策など、危機感を持って取り組まなければならない課題が膠着化している一方、次々と目新しいことに取組んだり、市長が自らの実績としてアピールできそうな条例づくりに励んでいるのは、喫緊の課題における停滞感を隠そうとしている姿勢の表れである」と指摘させていただきました。

広報かまくら 3月 15 日号特別版は、「まちの未来へ向かって」というタイトルのもと、深沢地域の整備や公的不動産の活用などと共に、民間企業との連携で新しいテクノロジーを活用した市民サービスの提供と、高度な先進技術の導入であらゆる社会的課題が解決されると政府が提唱している「ソサエティ 5.0」について紹介をしています。

SDGs 持続可能な開発目標は、17 の目標と 169 のターゲットから成る極めて包括的なものです。政府は SDGs 推進本部を設置して取組みを進めていますが、日本の「SDGs モデル」を特色づける 3 つの柱のひとつが、只今触れました「ソサエティ 5.0」を、SDGs と連動させ官民をあげて推進することです。松尾市長がめざす市政運営はこれと方向性を同じくしているようです。

鎌倉市は昨年 6 月に「SDGs 未来都市」及び「SDGs モデル事業」に選定され、国の地方創生支援事業費補助金の交付を受けました。先行モデル事業として、旧村上邸を活用し、経済・社会・環境の SDGs 好循環モデルを創出し、SDGs の視点に立って市の次期基本計画の策定を行う、としています。

議会答弁の中では、「SDGs という国際的なモノサシ」という言い方がされました。確かに国際的なモノサシなのですが、既に申し上げたとおり極めて包括的なものであり、大きく捉えた地球環境への危機感から考え出されたものであることを踏まえ、都合の良い部分だけを使うモノサシに陥らないようにしなくてはなりません。

また、「SDGs の目標年度である 2030 年からバックキャスティングで施策を構築する」という言い方もされました。バックキャスティング (backcasting) とは、未来の到達点や目標から逆算して現在の施策を考える発想です。全面的に否定するものではありませんが、膠着した現状や喫緊の課題から目をそらす「視点の移動」になってしまってははいけません。

ロードプライシングから始まって、RPA、テレワーク、パブリック宣言、FabCity 宣言、テクノロジーの活用をはかるとして様々な企業と結ぶ連携協定等々、市長は新奇な取組みを次から次へと繰り出しています。

以前から申し上げてきていることですが、民間企業との連携で新しいテクノロジーを活用した市民サービスの提供をめざすということでしたら官民連携の在り方について、本当はもっと議論をしておくべきなのです。つながらる鎌倉条例という耳に優しいけれども、条例をつくることで何が変わるのか今ヒトツ見えてこない条例よりも、官民連携の議論を深めることの方が必要とされていたと思います。これまでに何度も申し上げてきましたが、市長には一向に伝わっていないようですので、あえて乱暴な言い方をさせていただくと、鎌倉市が企業にとって都合の良いお得意様、使い勝手の良い実験室になってしまっはいけないということです。

鎌倉市民から必要とされる施策に着実に取り組むことが、市民が安心できる持続可能な都市計であると申し上げて討論を終わります。